



中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

昭和二十七年十二月五日 印刷
昭和二十七年十二月十日 発行

(乱丁、落丁はお取替いたします)

大菩薩峠 (第十五卷)

定価 三百八十円

送料 五〇円

著作権者 中里幸作

発行者 中里幸作

東京都品川区南品川五ノ十三

印刷者 森高繁雄

東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地

大菩薩峠刊行会

発行所 株式会社 彩光社

電話 神田 二二六四(番)
振替 東京 一九三九七六番

富士高速印刷株式会社印行

大
菩
薩
峠

第
十
五
卷

目次

新
月
の
卷
……………五

あ
と
が
き
……………梁取三義……………四八〇

題

裝

口

字

畫

繪

道

橫

三

重

山

蓋

信

大

庵

教

觀

編纂責任

梁 寺
取 島
三 粧
義 史

三十六
新
月
の
巻

留度とんどもなく走る馬のあとを追うて、宇治山田の米友は、野と山と村と森と田の中をかなり向ふ見ずに走りました。

併し、相手は何をいふにも馬の事です。さしもの米友も、追ひあぐねるのが當然でしたが、さうかといつて、そのまゝ引返す米友ではありません。殊に右の放たれたる馬には、長濱ながはまで買入れた家財雜具はいふに足らないとしても、たつた今兩替したばかりの何千といふお金が確實に背負はせられてゐる、金額の多少を論ずるわけではないが、殊にあのお嬢様が、この米友を見込んで、用心棒を依頼してある。その責任感からいつても、追及するところまでは追及せずにはをられないでせう。

それはさうとして、米友も亦心得た處もある、奔馬といふものは、前から捉へるに易くして、後ろから追ふにはこの通り骨ほねだが、さうかといつて馬といふ奴は、蝶々トンボの類と違つて、どう間違つても空中くうちゆうへ向けて逃走いつさうする事はない、天馬空を往くといふ例外もあるにはあるが、通例としては精々地上を走るだけのものである。あゝして精々地上を走つて

ゐるそのうちには前途から誰か心得のある奴が出て来て取捕へてくれるか、さうでなければ馬め自身が行詰る處まで行つて、立往生するか、顛落するかより外はないものだ——ただ、往來雜沓の町中でゝもあるといふと、他の人畜に危害を與へるおそれもあるが、その點に於てかういふ野中では安心なものだ——といふ腹が米友にあるから、焦りつゝも、幾らかの餘裕を持つて走ることが出来るのです。

處が、案に相違して、なか／＼前途から心得のありさうな奴が飛び出して取抑へてくれさうもなし、何かこの奔馬をして行きつもらせる處の障碍物といつたやうなものも容易にないのであります。

遂に一つのやゝ大きな川原中へ飛び出してしまひました。

「川へ來やがつた」

川原道を、遂にこの馬がガムシヤラに走るのです——その川原の幾筋もの流れを、むやみに乗り切つて、ずん／＼飛んで行く馬は、まだ、石田村の門前で引ばたかれた逆上がないで、お先まつくらがさせる業なのでせう。

やむ事を得ず、米友もつゞいて川原の中へ飛び下りました。

逆上し切つてお先眞暗な事に於て、奔れ馬ばかりを笑はれませんでした。幾分の餘裕を存して追ひかけて來たつもりは米友自身すらも、この時分は可なり目先がもうげんしてゐました。

「わあつ！」

といふ喚聲が、行手の川の向ふ岸から揚つて、さうしてバラ／＼と礫の雨が降つて來た時は、米友が、屹となつて向ふ岸を見込むと、その鼻先へ、今の今までまつしぐらといふ文字通りに走つて來た放れ馬の奴が不意に乗り返して來たものですから、その當座の米友は土用波の返しを喰つたやうに驚いたが、その邊りはまた心得たもので、

「よし來た！」

何がよし來た！　だかわからないけれども、今迄追ひかけても追ひかけても追ひかけ足りなかつた目的物が、今度は頼みもしないのに、自分で折返し疊返して來たのですから勿怪の幸ひといへばいふものゝ、この際、米友でなければたしかに引返し馬の爲に乗りつぶされてしまつたことは疑ふべくありません。

そこを心得たりと、身を沈めて、轡づらをしつかと取つた米友。

「どう、どう、どう——しつかりしやがれやあい」

米友程の人格者に握られた轡ですから、何の事はありませんでした。その途端に、馬の逆上^{せあ}がすつかり引き下つたと見えて、大きな目もパツカリと見えるやうになつて見ると、疲勞そのものが一時に露出したらしく、馬相應^{うまさうがう}の、嵐^{あらし}のやうな息をついて立ちすくみの體です。——こゝで米友は完全に奔馬を取捕^{とら}へることの目的を達しました。

その目的だけは完全に達したけれども、前後左右の分別までが、ハツキリと手に取れてゐるわけでもなく、頭にうつゝてゐるわけでもないのです。

第一、今までガムシヤラに走り續けてゐたこの馬の奴が、今こゝへ來てどうして不意に折返して來たか、前途に心得ある人が出て來たわけでもなし、廣い河原で、これぞといつて障礙物もありはしないのに——こいつがこゝで不意にあと戻りをやり出した理由と原因とは、よくわかつてゐないのです。併し、その理由と原因をわざ／＼と探し求めるまでもなく、米友の身の周圍に降りそゞろ石礫^{いしづて}が、取敢ず事の不穩を報告する。

片手で馬の轡を取りながら、さうして、石の飛んで来る前岸を見込むとさても夥しい人出。

向ふ岸の土手の全部が、殆んど人を以て埋つてゐる光景を米友がはじめて見ました。

「やあ、大變な人だな、蟻町のやうだ」

石の礫は、その夥しい人類の中から降つて湧いて來てゐることに相違ないが、この夥しい人類が、いつの間に、何の爲にこゝへ現はれたのだから、それは一先づ、米友の思案に餘りました。

成程、荒れ馬の飛んで來るのは危い、それ故に村の人が警戒を試みるのも宜しい、だが一頭の家畜の爲に、これだけの人数が繰り出して來るとは——第一、馬がこの川原へ來るか來ないうちに、その危険を慮つて、これだけの人数を狩り集め得たとすれば、その人寄は人間業ではない。

併し、また、他に目的あつてこゝに待ち構へてゐるんなら、何かその目的物がありさうなものだが、彼奴等の面といふ面、目といふ目はみんなこつちばかりを見合せてゐやがる——だから、この一匹の馬の爲にあの人数が繰出されたと見るより外は無え、大仰なこつ

た。

おや／＼、竹槍たけやりを持つてゐるぜ、竹槍を林の如くあの通り揃へて持つてゐる。こいつは驚いたな、タカが一匹の放れ馬の爲に、危ねえ！

クル／＼眼を廻して驚いてながめてゐるうちにも、礫の雨が、絶えず降つて来て、同時に向ふ岸で口々に、おれ達に向つて何をか罵りかけてゐるやうだが、ガヤ／＼して何の事だか聞きとれねえ。

米友としては、奔馬追及の目的は完全に達せられたことだし、たとひ、彼等が無理無體に礫の雨を降らしたところで、こゝで何も好んで宇治山田の網受あみうけの藝當をしてお目にかかる必要のない處ですから、その飛んで来る石の雨は片時も早く避けた方が賢いと思慮したものですから徐ろおもむに馬の口をとつて此方の岸へ戻つて來ると、

「發止！」

これはまた、どうしたことせう、今度は戻つて來る方の岸から、礫の雨が飛んで來ました。

「こいつは驚いた」

米友は馬の口をひかへて、戻り来る岸の上を見ると、そこにも土手の上一ぱい、芋の子を盛つたやうな人出です。それが口々に罵つてゐる、竹槍を持つてゐる。米友と馬とをのぞんで石の雨を降らしかける、それは前岸の光景と全く同じことです。

自分ながら落著いたつもりだが、まだ血迷つてゐた。向を換へたつもりが、實はもう一ぺん廻り過ぎて同じ方向に向いちまつたか、あはて者が馬へ逆さに乗つて尻尾を見て「おやこの馬には頭が無え」といつたが、乗り直して頭を見て「尻尾も無え」といつたといふ笑ひ噺がある。さうでなければ大きな鏡仕掛で、あちらの幻像をこちらへがんどり返しにうつし取つたものと見なければならぬが、事實上、米友がどちらを向いて見ても、兩岸が同じ光景だものですから、一時、どうしても、そこに馬の口を取りながら、立ちすくみの姿勢をとらざるを得ませんでした。

「わからねえ、わからねえ奴等だ」

それは、馬が馳けて行く方が用心するのは當然であるとしても、その用心か情力か何かで文句をいひ、石の一つも投げて見ようといふ手ずさみは、まあわかつてゐるが、もうこの通り、馬も取顧めてしまつて、さうして穩かに曳いて歸らうてえのに、その引返した方の

奴が、悪口をいつてこつちへ石を投げかけるてえのは、わからねえ理窟ぢやねえか。

かういふ人氣の土地か知らねえが——こんな事は初めてだ、一匹の馬の爲に、まあ、見るがいゝ、後から後からとあの出人は、村方總出だ。

おや／＼、竹槍を持つたのが、バラ／＼此方へやつて来るぜ。

また、向ふ岸からも竹槍を持つた奴が、バラ／＼と此方へやつて来るぜ、一體どうしようてえんだ。

このおいらと馬とを、兩方から挟み討ちにして、あの竹槍で突き殺さずにや置かねえといふ了見か——それは愈々わからねえ、第一、この馬と、おいらが何を悪い事をしたのだエ。

馬はやみくもに馳けたばつかりだ、おいらはそれを追つかけて來たばつかりなんだ、老人子供の一人にだつて、怪我あさせたわけぢやあねえんだ、村を騒がせて濟まなかつたといへば濟まなかつたに違えねえんだから、その點はおいらだつて詫びをしるといへばしねえとはいはねえよ、何もこつちも好きこのんで、馬を飛ばしたわけぢやあねえんだ、馬が何かに驚いて飛び出したんだ、何に驚いたんだか、そんなことは、まだ原因をたしかめる暇も

なく、おいらはかうして追ひかけて來たんだが——何にしてもこつちに責任のある馬には馬なんだから、詫びろといへば詫びらあな、あやまれといへばあやまつてやらあ——それをお前、何にもこつちに一言もいはさねえで、兩岸から挟みうちにして竹槍で突き殺さうたあ酷過ぎる！

タカが一匹の馬の畜生の事ぢやねえか——まるで、これぢや戦だ——まさかこの馬が千兩からの金を積んでゐることを知つてゐて、それを取りてえから、あゝして人數を集めたわけぢやあるめえ、さうだとすれば、村中が心を合せて切取強盜を商賣にしてゐるやうなわけのもんだが、今時さういふ商賣の村といふのはあるめえ、第一この馬が二千兩からの錢金をつけてゐるかゐねえか、それまで見きはめちやゐめえがな。

おや——来るよ——、本當にやつて來るぜ、あの通り若い奴が、竹槍を持つて、こつちの岸からも御同様。

さあ、もう仕方がねえ、かうなつたからはこつちも了見をしなくちやならねえ。

米友は川原の真中でぢだんだを踏みました。同時に、兩方の岸から、すさまじい関の聲が起りました。